

令和3年度 自己評価および学校関係者評価書

令和4年2月25日  
函館市立えさん小学校

1 本年度の重点教育目標

自ら考え行動できるたくましい子どもの育成 ～一歩先を踏む～

2 本年度の取組の重点

・豊かな心と健やかな体の育成 ・確かな学力の向上 ・地域に根差し信頼される学校

3 自己評価結果に対する学校関係者評価

分野	評価項目	自己評価結果		学校関係者評価		
		達成状況	改善の方策	自己評価の適切さ	改善の方策の評価	主な意見（改善策など）
確かな学力を育む教育活動の推進	主体的・対話的で深い学びの視点から授業改善に取り組む、児童の学習意欲を高めることができたか。	b	各種調査の結果を生かすとともに、授業改善を通して、子どもの学力向上に努める。引き続き、全教員が研究授業を公開するなど、積極的な校内研修を行う。	A	A	取組を評価するためには、学力の推移を示すなど客観的な資料が必要である。学校の努力は認める。
	学習の基礎基本の定着に向けた教育活動の工夫を行うことができたか。	b	複式学級において、複式を解消した指導機会を増やす。一人一台端末やデジタル教材の効果的な活用ができるよう指導方法について研修を推進する。基礎基本の定着につながる学校全体の取組を充実させる。	A	A	ICTの利活用が積極的に行われていた。PCを使って、ただ調べさせるのではなく、目的などに応じて子どもに考えさせることが大切である。
豊かな心を育む教育活動の推進	学校・家庭・地域での豊かな体験活動を通じて、人としての生き方や礼儀などを考える教育活動の工夫を図ることができたか。	b	地域の教育資源を活かしたふるさと教育の一層の充実を図り、ふるさとに誇りを持ち、心豊かでたくましい子どもを育成する。	B	A	学校・家庭・地域の体験活動は十分に行われていた。自己評価では「B」評価となっているが「A」評価としたい。
	他を思いやる心を育て、自己有用感や自己存在感を高める教育活動の工夫を図ることができたか。	b	教育活動全体で取り組む道徳教育を充実させ、他者を思いやる心などの道徳性を確実に育むとともに、様々なアセスメントを通して、子ども一人一人のよさを認め、可能性を引き出す声掛けや指導に努める。	A	A	子どもにとって教師の影響は大きい。子どもを認めて褒めることを大切にしてほしい。
健やかな体を育む教育活動の推進	望ましい生活習慣の定着に向けた教育活動の工夫を図ることができたか。	b	健康観察シートによる生活習慣の確認、児童の観察や声掛けを日常的に行うとともに、家庭と連携した学習習慣・生活習慣を育てる取り組みを充実させる。	A	A	自己評価（達成状況・改善の方策）は妥当で、次年度の取組に期待する。
	自ら健康で安全な生活を営む能力や態度を育てる教育活動の工夫を図ることができたか。	b	子ども自らが健康・安全、命の大切さについて考える道徳科の授業の充実を図る。また、きまりを守り、安全で秩序ある生活を送るよう、自己指導能力の育成を図る。今年度取り組んだ防災教育の成果を生かした取組を行う。	A	A	グラウンドで遊んでいる子どもたちが少ないように感じる。遊びを通じて、健康な習慣につなげることが大切である。
学校における指導体制等の充実	教育目標の実現に向けて教職員が適切な役割を果たすとともに、相互に連携しながら教育活動に取り組むことができたか。	b	日常の教育活動や学校行事の実施など、常に教育目標の実現に向けた取組となったのか反省を行う。複式解消、合同授業の実施など、資質・能力の育成を中心とした教職員の連携を図る。	A	A	自己評価（達成状況・改善の方策）は妥当で、次年度の取組に期待する。
	学校における業務改善に向けた取り組みを進めることができたか。	a	在勤時間の管理、会議の縮減、ICT機器の活用、ペーパーレス化など、業務改善に向けた取組を推進し、業務の効率化を図ることができた。今後、質の高い教育活動へつなげていきたい。	A	A	自己評価（達成状況・改善の方策）は妥当で、次年度の取組に期待する。
家庭・地域と連携・協働した教育活動の充実	コミュニティ・スクールの取組を行い、家庭・地域と一体となった学校運営を推進できたか。	b	4年目のCSは、コロナ禍で中止となった活動もあったが、「新春ふれあい交流会」を実施し、地域の方々との心温まる交流ができた。地域とともにある学校づくりを進める。	B	A	コロナ禍においても地域との交流を大切にしたい取組が行われていた。自己評価では「B」評価となっているが「A」評価としたい。
	家庭・地域・異校種間でめざす子ども像や教育目標、学校運営の方針を共有することができたか。	b	Google クラウドを活用した小中連携の推進や、校外生活委員会での情報共有を行う。学校行事のYouTube配信など、ICTを活用した取組を行うことができた。	B	A	中学校との連携した取組が随時行われていた。自己評価では「B」評価となっているが「A」評価としたい。

■ 自己評価達成状況

a	ほぼ達成できた (8割以上)
b	概ね達成できた (6割以上)
c	十分ではない (4割以上)
d	達成できなかった (4割未満)

■ 自己評価の適切さ及び改善の方策の適切さにかかる評価

A	自己評価及び改善策は適切であり、取組を進めるべきである。
B	自己評価及び改善策は適切であるが、若干の修正は必要である。
C	自己評価及び改善策の方向性はよいが、若干の修正が必要である。
D	自己評価及び改善策を再度検討する必要がある。